

『NEWS なオレたち』

著：神奈木智

ill：桜城やや

「大体、なんでこんなところにいたんだ」

口を開くなり、彼は真っ先に抗議してきた。

「もしかして、最初から俺たちを観察してたんじゃないだろうな？」

「なんで、俺がそんな真似しなくちゃなんないんだよ。第一、ここは学校なんだぞ。いつどこに出入りしようと、そんなの自由じゃないか。それに、俺は立派にここの生徒になったんだからな。そうだ、それを言いにきたんだっけ」

「え？」

「俺、ちゃんと条件はクリアしたぜ？」

「……………」

「おい、マジで覚えてないとか言うんじゃないだろうな。編入試験の時に、俺と話した内容を覚えてるだろう？ 俺が…」

「全科目十分台で九十五点以上取ったら、こっちの名前を教える」

「…なんだ。覚えてるんじゃないかよ」

少しだけ自信を失いかけていたので、夏は思わず拗ねた口調になる。彼としてはもう少し盛り上がった再会を期待していたのだが、あの上級生の登場でなんだか台無しな気分だった。

冬の冷気を含んだ風が、頭上の枝を小刻みに揺らしていく。そろそろ、コートの必要な時期に差しかかっているのだ。目の前でしゃんと背筋を伸ばしている彼は、真冬の空気の中でもこうやって凜と立っているのだろうか。その姿が一枚の絵のように脳裏に思い浮かび、冬の似合う美人というのは、凄絶な感じがするもんだな…と、柄にもなく夏はうっとりとした。

「一冬耶だよ」

枝が擦れる音に混じって、小さく声が届いた。

「藤原冬耶。それが、俺のフルネームだ」

「とうや…って、どういう字？」

「ほら」

口で説明するのが面倒なのか、彼は取り出した生徒手帳を夏の前へ突きつける。親の敵でも見ているような仏頂面の顔写真の隣に、端正な字で『藤原冬耶』と書かれていた。

夏がふらふらと指を伸ばすと、取られては大変とばかりに冬耶はさっと手帳をしまっってしまう。だが、先刻イメージした彼の立ち姿にこれ以上相応しい名前はないように思え、夏の頬は知らず知らずのうちに緩んできてしまった。

「なんだ…急にニヤニヤして、気味の悪い奴だな」

「だって、綺麗な名前だからさ。よかったよ。おまえが、ゴンスケとかヨネサクとかいう名前じゃなくて。意外性はあるけど、その顔には似合わないもんなあ」

「大きなお世話だ。ゴンスケもヨネサクも、立派な名前じゃないか。そっちこそ、日射病

みたいな名前がぴったりだな」

フンと小バカにしたような笑みを浮かべてから、冬耶はそっと右の手首に目を落とす。きつく掴まれたその場所には、うっすらと赤い跡がついていた。

「ひっでえな…」

夏の腹立たしげな一言に、冬耶が静かに顔を上げる。

「それ、あいつがやったんだろ。かなり派手に言い合いしてたから、俺にまで声が聞こえたんだよ。でも、まさか冬耶とは思わなかったけどな。おまえ、あんな大声で怒鳴るんだな」

「早速、呼び捨てか。…まあ、いい。そうだよ、説得ができるのは相手が人間の場合のみだ。あんなケダモノは、怒鳴るか殴るか蹴り倒すか…」

「…おいおい」

「もっと、痛い目に合わせてやればよかった」

「涼しげな顔して、凄いこと言うなあ」

夏が呆れていると、何を思ったのか冬耶はゆっくりと眼鏡を外して微笑んだ。初めて出会った時の美貌が蘇り、やっぱりすっぴんの方がいいのにな、と夏は心から思う。すると、彼はまるで夏の心を読んだかのように、「これは、穏やかな学生生活を送る必需品なんだ」と説明した。

「編入試験の日は、たまたま眼鏡を作り直してたけどな。ちょうど二、三日前に、やっぱりさっきみたいな輩に絡まれて壊されたばかりだったから。今日は、そこまですらなくて助かったよ」

「ちょっと待て。つまり、あんなことがしょっちゅうあるのか？」

「…しょっちゅうじゃないけど、何度かは経験があるな。それでも、眼鏡をかけるようになってからはだいぶ絡まれなくなったんだ。前は、目つきがきついとか視線が痛いとか、わけのわからない文句を言われてけっこう苦労したから」

「成程…それで必需品か…」

確かに、せつかくの美貌が二割減になっても、目つきの鋭さが緩和される分、本人としては生活しやすいのかもしれない。いや、本人のみならず周囲の人間にとっても、わけもなくドキドキする必要がなくなるので有難いアイテムと言えるだろう。

「それじゃ、もともと視力が悪いんじゃないんだ。単なるカムフラージュってわけだな」

「ああ。幼なじみのアイデアなんだ。昔から、俺がやたらと周囲から浮くのを心配してくれて、いっそ眼鏡でもかけてみたらどうかって。初めは俺もバカにしてたけど、意外に効果があったよ」

「幼なじみって…慎吾のことか？ 生徒会長の？」

夏の問いに冬耶は軽く頷き、再び眼鏡をかけ直す。度の入っていないガラスを通して、彼は何度か瞬きをくり返して見せた。僅かに和らいでいた表情が、その度に知らない他人へ変化していく。気がつけば、いつの間にか夏の前にいるのは風紀委員長の藤原冬耶だった。

彼は腕時計をちらりと覗き、「もう校舎へ戻らないと…」と真面目くさった声で呟く。だが、まだ冬耶と話していた夏は、とりあえずの話題を求めてしつこく口を開いた。

「あの…そうだ、おまえ風紀委員長なんだろ？ てことは、毎朝の遅刻チェックは冬耶がしてるのか？ 俺、実は昨日五分だけ遅刻したんだけど…いなかったよな？」

「遅刻した？ 転校初日から、堂々とか？」

迂闊な一言を聞いて、たちまち冬耶の顔が陰しくなる。だが、今更怒ったところで無駄だと思ったのか、彼はカミナリを落とす代わりにふっと短いため息を漏らした。「遅刻と下校時刻のチェックは、委員の当番制だ。でも、あんまりうるさく言ったせいかな、慎吾なんかは俺が当番じゃない時でも血相変えて駆け込んでくるけどな」

「そっか、それで…」

昨日の様子を思い出し、しみじみと夏は納得する。呆れるほどの早足は、全て冬耶の説教の賜物だったのだ。

「だけど、感心だな。こんなに早く登校して、昨日の遅刻を挽回するつもりか？」

「俺、今日は冬耶へ会うために来たんだよ」

夏の答えに、冬耶が不思議そうに目を細める。本気でわかっていないところが、彼の素朴な魅力なのかもしれない。

「冬耶の名前、知りたかったからさ。風紀委員長だって聞いて、それなら朝が早いんじゃないかと思ったんだ。昨日はいろいろ雑用に煩わされて、とうとう会えなかったし。だから、今朝は頑張って早起きした。偉いだろ？」

「…別に。学生なら、早起きは当然だ。偉いとかそういう問題じゃ…」

「おまえのために起きたってとこを、ちゃんと評価してほしいんだけど？」

まるで口説き文句を口にするように、冬耶の目をジッと覗き込む。二人がこんなに間近で顔を合わせるのには、実はこの時が初めてだった。ガラスに隔てられた向こうから、漆黒の瞳が相変わらず勝ち気な輝きを放っている。はたして、冬耶はこれまでに制御不能な感情に捕らわれた経験が一度もないのだろうか。ふと、そんな疑問を覚えるくらい、その瞳は冷たく自信に満ちていた。

「ああ…成程なあ…」

「え？」

「よくわかった。これじゃ、目をつけられるわけだよ」

「…なんの話だ？」

思わず口から出た独り言に、素早く冬耶が反応する。夏は真面目な顔で彼を見返すと、赤く色のついた手首をそっと引き寄せた。その真意がまったく読めない冬耶は、困惑しながらも黙って次の動きを待つ。やがて、夏が長い指を絡めて、冬耶の手を柔らかく握りしめた。口許に意味深な微笑をたたえ、儀式めいた仕種でその手を持ち上げた夏は、唇を薄く開いてこう言った。

「—冬耶。俺から、目を逸らすなよ？」

淑女に口づける騎士を真似、冬耶と瞳を合わせたまま、彼の手の甲にゆっくりと唇を寄せる。夏の唇が触れた瞬間、冬耶の身体が小さく跳ねた。怒りと屈辱に燃える目で夏を睨みつけ、彼は急いで手を引き戻そうとする。けれど、先刻の上級生の時には難なく振りほどけた指が、今度はどうしてもきつく絡みついたまま離れなかった。

顔をほんのり赤らめて、冬耶は無言で夏を睨み続ける。夏の言った通り、それこそ一瞬も目を逸らさず、二人は沈黙の中で見つめ合った。

「…というわけで、俺が真の勇者第一号な」

ガラリといきなり口調を変え、パツと夏が手を離す。冬耶は急いで彼と距離を取ると、口づけられた手の甲を労るように何度も撫でた。

「ふ…ふざけるなっ。なんなんだ、何が勇者だっ」

「だって、俺は冬耶の視線を受け止められる数少ない男だからね。どんなに睨まれて

も目を逸らさず、理性もしっかりしているなんて、立派な勇者だと思うぜ？」

「はあ？」

夏の言っていることは、冬耶の耳には頭の悪いわ言にしか聞こえない。彼に唯一わかるのは、唇で触れられた手の甲がやたらと熱いという事実だけだ。

「この前、俺が冬耶の顔をジロジロ見てたら、そんな風に見られたことないって言っただろ？」

「あ…ああ…」

「その時は、まさかって思ったんだ。だって、おまえ綺麗だし。そういう顔に生まれてて、誰からも注目されないなんて、まずありえないからさ。だけど、今日ちょっとだけ理解できたよ」

「理解……？」

「ああ。皆の方が、先におまえの視線に負けちゃうんだ。だから、ジロジロ見たりできないんだよ。おまけに、たまに勇者登場かと思えばさっきの上級生みたいな変態だし」

「……………」

同性に懸想したからといって、『変態』と言い切ってしまうのは気の毒かもしれない。だが、力づくで他人をどうこうしようなんて、その発想自体がすでに不健康の極みだ。まして、それに色恋が絡んでくれば、生理的な問題だって生じてくる。夏も初めは単に絡まれてるだけなのかと思ったが、上級生が無理やり冬耶を抱きしめようとしたのを見て、言い様のない怒りを覚えたのだった。

「冬耶の目は、ある種の人間をきつと刺激するんだな。まず、おまえの視線に負けないうことは、ある程度自分に自信があるタイプだ。だけど、そいつらは本物じゃない。実際は根拠がなかったり思い込みだけで中身が空っぽだったりする。そういう人間の裏のコンプレックスを、冬耶の視線は逆撫でするんだよ。おまえが、あんまり何もかも見透かすような目をするから」

「そんな……………」

「ま、これは俺の推理だけだな。けど、案外当たってると思うぜ。周囲から極端に避けられるか、絡まれるか。そのどっちかの扱いしか受けないっていうのは、おまえ自身が極端な人間だからだよ。眼鏡、かけといた方がいいかもな。俺は、すっぴんの方が好きだけどね」

「……………」

絶句している冬耶を見つめ、(それにしても…)と夏は思う。あの上級生は、冬耶に迫りながら「おまえの評判だって回復する」と言っていた。それは、何を意味しているのだろうか。

(クラスの奴らも、なんか気になる言い方してたよなあ…)

“いろいろ、いわくのある奴だから”

それは、単に同性に絡まれやすいという彼の特徴だけを指したものののだろうか。(まあ、一度に知る必要もないけどな)

今日は、とにかく名前を漢字で知ることができた。しかも、彼が涼やかな外見に似合わず、かなり腕っぷしが強いのもこの目で目撃した。毎回こうして新たな発見があるのなら、急いで全てを知るのはむしろもったいないと夏は思う。

冬耶の魅力の一つ一つに、いちいち感心したり感動したりするのが凄く楽しい。

これでもう少し愛想を振りまいてくれたらとも思うが、贅沢を言うのはやめておいた。  
今のままの仏頂面でも、冬耶の美貌には十分な価値がある。

夏の言葉がショックだったのか、冬耶はまだ黙り込んだままだ。だが、能天気な夏は  
思い詰めた顔もなかなかだな、と極めて自分勝手な感想しか抱いていない。

(やっぱり、頑張っただけの甲斐はあったなあ)

一人で深く満足し、夏は密かにほくそ笑むのだった。

本文 p51～61 より抜粋

作品の詳細や最新情報はダリア公式サイト「ダリアカフェ」をご覧ください。

ダリア公式サイト「ダリアカフェ」

<http://www.fwinc.jp/daria/>